

青石の考古学 ―青石で石器を作った古代人―

徳島大学総合科学部 教授
中村 豊(考古学)

日本列島では、約3万年前の後期旧石器時代から、約2000年前の弥生時代中後期にいたるまでの長きにわたって、石をおもな利器の素材として活用してきた。

約1万5000年前から約2500年前の縄文時代以降磨製石斧が広く普及していった。約5000～6000年前の縄文時代前期～中期以降、徳島地域でも結晶片岩製の石器の生産が開始される。美波町田井遺跡では、縄文前期後半～中期前半の、結晶片岩製の磨製石斧が多量に出土している。同様の石斧は、阿南市深瀬遺跡においてもまとまって出土しており、一定程度の流通がみられたと考えられる。

約3000年前、縄文時代晩期前半の東みよし町稲持遺跡では、蛇紋岩製の磨製石斧が多量に生産された。この蛇紋岩製石斧に関しては十分わかっていない。

弥生時代になると、灌漑水田稲作とともに、多くの大陸系文物が、朝鮮半島を経由して伝播する。なかでも大陸系磨製石器と呼ばれる一連の石器群が新たに定着する。その器種は、樹木伐採用の太型蛤刃石斧、樹木加工用の扁平片刃石斧・柱状片刃石斧、農具としての磨製石庖丁・磨製石鎌、紡織具から磨製石鋸や磨製石剣といった武器にいたるまで多様性に富んでいる。

磨製石斧では、林業用の伐採斧と、木材加工用の扁平片刃石斧・柱状片刃石斧に機能分化する点が大きな特徴である。縄文時代では、平面台形状の同じような形態の磨製石斧が、単に大小によって使い分けられていた。

大陸系磨製石器は、早くも弥生時代前期には国内で生産されるようになる。徳島でも、一部の石器は生産されたものと考えられ、香川県などに一部がもたらされたものと考えられる。

弥生時代中期になると、吉野川中流域の河岸段丘において、多くの集落が形成される。なかでも、阿波市日吉谷遺跡、同桜ノ岡遺跡、同赤坂Ⅲ遺跡など、弥生時代中期前葉～中葉の遺跡において、青色片岩製の石器生産が開始される。

青色片岩は、藍閃石片岩とも呼ばれ、昨年4月徳島県の石に制定された。他地域でも広く産出するが、「資源」としてまとまった量を多量に確保できるのは、徳島県眉山と高越山においてほかない。この眉山や高越山産青色片岩製の柱状片刃石斧や一部の扁平片刃石斧は、弥生時代の人々に相当好まれたようで、北は



青色片岩製の磨製石斧(徳島市庄・蔵本遺跡)

兵庫県但馬地方から、南は徳島県海陽町や和歌山県みなべ町、東は奈良県田原本町唐古・鍵遺跡、西は松山市祝谷遺跡など、広域にわたって出土している。和泉市池上・曾根遺跡や、神戸市玉津田中遺跡、香川県東かがわ市池ノ奥遺跡、同市成重遺跡、善通寺市旧練兵場遺跡、岸和田市畑遺跡などでは約10点を超えるような、まとまった量の出土が認められるので、いくつかの遺跡に集積された後、改めて各地に配付された可能性がある。

東大阪市巨摩・若江北遺跡や、茨木市東奈良遺跡では、墳墓からの出土が認められる。また、阪南市男里遺跡や三田市有鼻遺跡、同市奈カリ与遺跡など、未使用の完形品が出土する。木工具だけではなく、交換材や花嫁代償、儀礼用として用いられた可能性もある。

青石は、鉄器普及後も古墳の石室や観賞用として、現在まで長く使用されてきたが、近年は忘れられつつある。伝統ある青石文化の継承は、われわれの課題といえよう。

総合科学部公開セミナー

第8回：9月29日(金) 18:30～20:00

対象：一般・大学生・高校生 参加費無料

会場：総合科学部1号館南棟3階 第1会議室
事前申込が必要。駐車場の利用可。

詳細：総合科学部 HP

<http://www.tokushima-u.ac.jp/ias/>

申込み・問い合わせ先：

徳島大学総合科学部事務課総務係

TEL:088-656-9779

E-mail: sksounks@tokushima-u.ac.jp